青山国際政経論集 107 号，2021 年 11 月

資　料

# オーラルヒストリー：終戦前後の平壌在住者，元鐘ヶ淵工業平壌製鉄所勤務　田口裕通氏

聞き手　木村光彦*，2002 年 2 月 25 日

インタビューでは，田口氏の記憶は非常に鮮明であった。2021 年現在，存命か不明であるが，本証言は終戦前後の平壌の標記製鉄所と海軍燃料廠についての貴重な資料である。同製鉄所・燃料廠の沿革，概要は，木村光彦・安部桂司『北朝鮮の軍事工業化』2003 年，知泉書館，6–7, 31–32 頁参照。

以下，聴取した証言をそのまま文字化する。音声不明な個所は○印で示す。

–（木村，以下，同）鐘紡の本社からいただいた資料によりますと，1945 年，昭和 20 年の 4 月から……

そうです。4 月の 1 日入社なんです。

–ちょっと，経歴を教えていただけますか？

はい。下関で生まれたんですが，届けは平壌から出ていると思います。というのは親父が平壌におりまして，生まれるためにお袋が下関に帰って生んだんです。親父はもともと裁判所の書記をしておりまして，平壌の地方法院裁判所というんですね。それから，何年か，私が工業の，商工学校の 2 年，1 年生だったかの夏に保護司になりまして，地方法院の保護司で，京城に転勤したんです。

*　青山学院大学名誉教授

© Aoyama Gakuin University, Society of International Politics, Economics and Communication, 2021

–じゃお父様は，もともとは法律の専門家として勉強されて，平壌に何年に着任されたんですか？

そこらへんよく分らないんです。最初に渡ったのがだいぶ若い時のようです。お祖父さんが平壌の刑務所の刑務官か何かをやっていたようです。

–はあ，すると 3 代にわたって朝鮮に縁があると。お父さんは平壌でお生まれになったんですか？

いえ，日本で生まれたんですけど，家族ともども全部渡ったのは親父が小学校 5 年生とか 4 年生とかというのを聞いたことがありますけどね。で，中学は平壌に一中，二中，三中とあったんですけどね，その一中を卒業して，裁判所に勤めたようです。

–ずっと平壌におられてそのあと京城に転勤されて？

そのあと転勤しまして……京城には 3 年ぐらいいましてね，終戦の 1 年前ぐらいに辞めまして，鐘紡の庶務課に入ったんです。鐘紡の平壌製鉄所の庶務に入ったんです。

–何歳ごろですか？

47，8 ですかね。

–そうすると田口さんとほとんど同期で入られた？

1 年ぐらい早く，1 年か 2 年早かったと思いますね。私も鐘紡に入ったというのは，親父のあれで，学校卒業とちょうど同時に徴用令がかかったんです。徴用令がかかったものだから，大変だろうからというので，たしか工場長をされていた藤原じゅうぞうさんという方のお話で鐘紡に入れていただいたんです。

–田口さんは平壌で育ってられて？ 平壌ではどういう学校に？

はい，小学校は山手小学校，一中の前にありまして，南山町のすぐ横ですね。それから鎮南浦公立商工学校の機械科に行ったんです。

–鎮南浦ですか？

はい，そこを卒業して鐘紡に行きました。

–じゃ，鎮南浦のこともよくご存じですか。

そうですね。4 年半近くおりましたから。

–またあとで鎮南浦の話は聞くことにしまして，鐘紡に 4 月に入られて，当時，私の関心のあるのは機械設備とか，どういう生産をしていたとか，それをどこに売っていたとか，大体のことはここに書いてあって，それから吉田善蔵さんという方が，この方はご存じないですか，今 90 すぎなんですが，この方，京城におられて，製鉄の担当で何回か平壌のほうに出張で来られていたという方で，お手紙をいただきまして，多少のことも教えていただいているんですが。

いや……

–写真がここにありまして，こんな感じですか？

そうですね，実際には 2 基しか動いていないんです。

–あ，そうですか。全体で 50 トン能力の高炉が 12 基，20 トンが 10 基とありますが……

完全に稼動しておったのは，私が知っているかぎり 2 基だったと思いますね。

–あとは動かなかった？

いや，完成はしてないんです。というのはですね，たしか熱風炉が間に合わなかったんじゃなかったですかね。熱風炉はまだ建設してました。熱風炉が 4 基か 5 基ありましたね。高炉自体はいつでも稼動できる状態だったことは間違いないと思います。熱風炉が一部できていなかったと思いますね。

–そうすると高炉は未完成というより未稼動ですね？

はい，未稼動だったと思います。

–この工事には立ち会っているんですか？

いえ，私，建設設計のほうだったもんですから，全然，ノータッチです。知りません。私たちが入ったときは，高炉は全部建ちあがってましたから。

–完成していた？

はい，まだスキップか何かを入れていたと思います。

–最終的には 2 基のみとすると，生産は細々という感じですか？

そうですね。50 トン高炉 2 基動いて，あとは，出していたのかなぁ。ちょっと分からないですけどね。あの，余熱でだいぶコークス回さないと高炉動きませんので。だから実際には，燃焼していたのかもわかりません。銑鉄出してた

というのは 2 基，知ってました。50 トン炉が 2 つですね。あと 20 トン炉のほうはちょっとよく分らないですけどね。結構，離れているんですよ。歩いて行けっていったら大変なんです。

–事務室から，その……

高炉までだいぶあります。自転車でね，10 分ぐらい。

–そうですね，何万坪という規模ですね。

大きいんですよ。当時の国鉄のね，大同江という駅から力浦という駅のちょっと手前までが敷地だということを聞いたことがありますよ。

–ああ，そうですか。80 万坪と書いてありますね。従業員の方は何人ぐらいおられました？

全然分かりません。覚えてないですね。聞いたことあるんですけどね。というのは，海軍の方がおられまして，軍需工場ですから，監察官みたいな方がおられまして，その人の話のときに，聞いたことあるんですけど，ちょっと覚えてないですね。

–大体，何人ぐらい出入りしているとか，あまりにも広いから分からない？

分からない，3 交替やっているもんですから。私たちは昼間だけですよね，8 時から 6 時までですか，現場は丸っきり分からない。それと，工員，だいぶおりましたよ，工員食堂でも 2 回に分けて食べていたようですから，お昼。

–現場の作業員の方はみんな朝鮮の人ですか？

いいや，そうじゃない，日本からも来てましたね。日本人の方もおられましたよ。

–それは技術者で。

そうですね。

–上のほうの人？

ええ。

–実際の作業はもちろん地元の人ですよね？

地元の人というよりか徴用工もおった気がしますけどね。

–あ，朝鮮人の徴用工。

ええ。その中にやっぱり，何ていうんですか，技術者みたいな，学校出た人が長で現場仕切るっていうんですか，そういう人もおりましたね。何か，日本語，非常に上手にしゃべる人もいるし，我々の学歴より上の方がおりましたよ。
–あ，朝鮮の方で。
ええ。炉前で。
–じゃ，当時どういうふうな生産状況だったかというのは，直接には分からない？
ちょっと，知りません。
–製品はこの本では，内地に送ったと，鎮南浦から。
そうですね，大同江の川を利用して鎮南浦で船積みをされているということ。
–この，先ほど，吉田さんという方なんですけど，この手紙では鉄道で釜山に運んで，釜山からというふうに書いてあるんですけど。
それもあったかもわかりません。鉄道，引き込まれてましたから。鉱石から何から全部貨車で入って来てましたからね。鉄鉱石，鉄原の方から。
–石炭ですね，コークス炭なんかは，満洲，あの中国大陸から入って来た？
何か，入ってましたね。
–鉄鉱石もそうなんですけど。
ええ。えーとね，化成か（課？）というのがあって，化成炉でコークスこしらえてました。だから何というんですか，材料だけ入れて何もかもみな造って銑鉄を出してたということだけですね。将来は圧延までやるという話は聞いてました。
–はぁ，圧延の計画も一応あったと。
はい。転炉，圧延，へいしゃ炉までは計画あったようです。
–そうですか，あと，煉瓦工場が。
煉瓦工場ありました。
–その辺はどうですか，それも遠くてなかなか。
そうですね，煉瓦工場まで，行ったことないんですけどね，図面は描いたことあります。熔鉱炉の耐火煉瓦です。

–耐火煉瓦の工場の図面を描かれた？

いや，そうじゃなくて，煉瓦自体を熔鉱炉の中に何十，何○，煉瓦組みますね，それを描いたことはありますけどね。

–熔鉱炉にどうやって組むかという設計をやったと。

はあ。

–そうですか，じゃ煉瓦工場，直接はご覧にはなってない？

見てないです。ていうのは，工場の中，見せてもらえなかったです，われわれ，入社しても。社員でも。

–社員でも，見せてくれない？

はい。工場の中は，もう，通るとこ決まってるわけです。それから，中，枝葉で入ることは禁じられてましたから。

–厳しいですね。

厳しかったですよ。

–それは軍が……

それもあったんじゃないでしょうか。

–軍人は……

海軍の方が二人か三人，しょっちゅう出入りしてました。

–なるほど，そうですか。昭和 20 年の 2 月に軍の命令で 50 トン炉 2 基を北支，中国ですね，に移設したと，ここに書いてあるんですけども……

あの，部品を送ったかもわかりません。部品というのは，バラバラにして。

–解体して……

どこに送ったかは知りません。

–やっぱりそういうことがあったと。

ええ。

–2 基ですから，まあ，全体が……

まだベースがね，全部で 14 基あったのかな，ベースが 14 基ありましたから，だから，組み立ててない熔鉱炉があるわけです。その部品があちこち，こう煉瓦から何から積んで置いてありましたからね。

–そういうものを送った可能性がある？

それを1基くらって（？），コンプリートで送ったんじゃないでしょうか。解体して送ったというのは聞いてませんけど。あるいはその前に解体したのかもわかりません。

–じゃ大掛かりに解体工事をやっていたと，そういうことはないわけで？

ないです。図面やけ（？）は何べんもやりましたけどね，熔鉱炉の。

–そうして，あの，そういう具合で，じゃあ4月から8月ですね，終戦，その前後の，15日のあとですね，その辺の状況は？

えーとね，15日以降，出銑はありました。炉を止めたのはね，いつごろ止めたんでしたかね，8月一杯までは炉は動いてたんじゃないかと思いますけどね。ひょっとしたらまだずっと動いてたかもわかりません。

–そして，どういうことが起ったんですか？

えーとね，そのあと，接収をされました。接収のときはもう，出社に及ばずで，私たちはもう入れなかった。

–何日ごろですか？

えーとね，9月の初め，4日か6日だったと思うんですけどね。ロシアの進駐がある前だったか，後だったか，そのところははっきりは覚えてません。あの近辺だと思います。

–えーと，どういうふうな命令，ま，じゃ，ロシアが来るか来ないかのときに，朝鮮人のひとが……

そうそう，えーとね，武装解除があってすぐだったと思うんですよ。

–武装解除は8月の……

20日すぎじゃないですかね，だと思いますけどね。ちょっと覚えてません，そこら辺は。

–武装解除で，そして，どういう，具体的に……

何かね，何とか委員という人たちが来て，接収をするということで接収をされたんですけど，そこら辺のところはくわしく分りません，我々には。

–そして，出社に及ばずということで，もう一切……

工場に入れない，はい。もう中には入れてもらえませんでしたから。

–それは，ほかの日本人もみな，そうでした？

大体そうじゃないですか。要するに，工場の幹部の方は引き継ぎとか，あるいは書類だとか，在庫はどうだとか，いうようなことで呼びつけられて，えー，やったような話を聞きました。そのあとですかね，よく分らないんですが，現金がどうのこうのっていうことで警備部長と工場長ですか，事務長だったか，何か，連れて行かれて刑務所に入れられたという話は聞いたことあります。藤原じゅうぞうという人が工場長だったんですが，やっぱ，1年ぐらいは刑務所に入れられたんじゃないですか？

–藤原さんは。

はい。それから，経理部長だったか，遠藤さんっていう方じゃなかったかな，と思うんですけど，ちょっと名前をよく覚えてませんけど，その方も引っぱられたっていう話を聞いてます。

–そうですか，そうすると，じゃ9月4，5日，まあ，出社に及ばずという命令が出て，そのあとはどうなって，ご自身はどうされたんですか？

私はね，家の接収がありまして，そして，あの，収容所に入れられました。それからすぐなんですけれども，技術者ということで，平壌寺洞炭鉱の電気，ポンプですね，坑内ポンプの係として，連れて行かれて，そこで1年仕事しました。

–ああそうですか。収容所に入ったのは何日ですか？

えーと，9月の半ばごろじゃなかったかと思います。日にち，ちょっと覚えてません。

–それ，どこのですか？

朝鮮赤衛隊っていう赤の腕章したのが来ましてね。

–家に？

はい，で，全部接収されました。

–どこの収容所？

寺洞炭鉱の中に……

–寺洞（じどう）？

はい，寺洞（じどう）っていう町があるんですよ。

–あー寺洞ね，朝鮮語でサドンって言うんですけどね，寺の洞穴ですね。

そうそう，寺洞炭鉱，これ，海軍工廠の，あそこに連れて行かれまして。

–家から，その収容所が寺洞炭鉱にあったんですか？

寺洞炭鉱，すぐ横にあったんです。

–すぐ横？

はい。山ひとつ越したらってとこですね。

–そこにたくさんの日本人が？

えーとね，うちの辺ですから，そうですね，近辺の，あれで，40 所帯か 50 所帯ぐらい。

–あー，まとめて。

まとめて。

–でも，それ，収容所っていっても，もともとは収容所じゃないですよね。新たに造ったんですか？

バラックです。

–新たに造ったんですか？

バラックがあったんです。

–朝鮮人の何か，坑夫の……

そうです。あの，トンネルっていうんですか，地下壕を掘ってた，バラックがあったんです。そこに全部，入れられたんです。

–それは，要するに，炭坑の地下壕の……

いえ，そうじゃなくて，軍が使っといたやつです。

–あー，その地下は何のために？

要するに，何のためだったんですかね，あそこに秋吉師団っていう師団がありましたから，それの軍関係の掩体壕（えんたいごう）とか何かを掘ってたんだと思うんですけどね。

–そのバラックがあって，そこ……

そこに朝鮮人を連れて来て，飯場に寝泊まりさせて掘ってたというバラックなんです。

–そこに連れて行かれて……

ええ，そこに全部収容されましたね，一時。

–それ，40 所帯ぐらいですか……

40 所帯ぐらいですね。

–そして，そこに 1 年？

いえ，それからですね，寺洞炭鉱のポンプ係として連れて行かれて，社宅を貰いました。炭鉱の中では。

–炭鉱は近くですよね。

近くです。

–歩いて行ける範囲？

歩いて行けます。

–社宅，貰った……

はい，社宅っていうか，長屋ですけどね。一間の長屋で。

–それは，いつですか，大体？

10 月ごろじゃなかったか……

–10 月？

はい。最初はね，あの，技術屋っていうことを言わずに，全部来て手伝えっていう言い方で，1 日 1 円 50 銭ですか，日給が 1 円 50 銭でということで，いやだとも言えんしということで行ったんです。

–それは 40 所帯のうち何人かっていうのは，全員じゃなくて……

ほとんど，全員っていったって 1 所帯 1 人か 2 人，要するに，何人っていう人数を言って来るわけですよ。

–何人出せと。割当てで。

はい，割当てで。最初行ったときは，それで，じゃ俺が行こうかっていうんで，私が出て行って，石炭下ろししました，最初は。貨車で積んで来るやつを下ろして，煉炭工場に運ぶわけですね。あの近辺はね，寺洞炭鉱それから，か

わへだったか何ていうところだったか，にも炭坑の坑内があって，あちこちからやっぱり，近くではいろいろ坑道があったんです，だいぶ離れてますんでね，貨車で運んでました。

–そしてそれを下ろして……

煉炭工場に入れる作業ですね。荷下ろし作業というんですか。昔は朝鮮人がやっていた仕事を日本人に全部切り替えたっていう……

–そのとき，煉炭工場はどんな具合でした？ ちゃんと動いていた？

稼動してました。ていうのは日本人の技術者がそのまま残ってますから。そのまま〇〇〇使えるようにしてたということ…… だから煉炭工場で働いてた人は軍属なんですね，ところが軍属は全部ソビエトに連れて行かれたんですけれども，たまたまそこに残っている技術屋さんは残していたんです。

–何人ぐらいですか？

えーとね，20 人ぐらいおりましたね，日本人の方。

–それと，田口さんみたいに連れて来られてきた作業する人，全部で日本人は何人ぐらいいたんですか？

あのころね，日本人は 100 人ぐらいいたんじゃないですか，全部で。えーと，2 交替制で居り（下り？）ましたからね。貨車積み，貨車下ろし，途中で，あの，トロッコを押して回ったりとかっていう，要するに，下の働く仕事ですか，そういうのを日本人にやらせてましたね。それから，病院では看護婦さんは日本人の方，だいぶおりましたね。

–あー，そうですか。

はい。

–その辺の話は非常に興味あるところで，海軍の燃料廠，なかなか調べられなかったんですけど，思いがけず，これはいいお話を…… 煉炭工場の様子，もうちょっと，どんな具合だったか……

うーんと，煉炭工場はあまりくわしくは内容，知りませんけどね，とにかく，豆炭ですか，こんなちっちゃな，船に使ってたような，昔の，それを造ってましたね。ピッチ入れて。

–ピッチは何を使ってました？ 何のピッチですか？

何のピッチ使ってたんですかね，硬いカンカチのタールピッチだったですね。

–タールを固めた……

ええ。

–煉炭工場の中はどんな……

煉炭工場，そうですね，昔のタイプですから，昭和 20 年ごろですか，あまりいい設備ではありませんでしたけど，全部，動いてましたね。

–広さはどのぐらいですか？

かなり大きかったですよ。

–体育館ぐらい？

いやあ，そんなもんじゃないです，もっと大きいですよ。石炭を上に運んで移動していって，攪拌してタールピッチなんか溶解して入れてくるんですからね，圧延して。高さは 2–3 階建てぐらいですか，大きさはね，奥行きが 20 メーターぐらいありましたからね。

–建物は？

建物はね，立派な建物じゃないんですよ。鉄骨でこしらえたトタン張りの外壁で，2 棟ですか，並んでた……

–2 棟並んで，その 1 棟が 2–3 階建てで，奥行きが……

20 メーターぐらい，もっとあったかもわかりません。

–かなり天井が……

天井高かったです。

–吹き抜けというか，突き抜けているような……

ええ。何かね，上に持っていって，炉みたいなのに落として攪拌して，蒸気使ってたのかな，何か，熱でピッチ溶かして石炭と混ぜて，無煙炭で混ぜるわけですね。それから型に，ロールの型に嵌めて，出てくるというやり方……

–豆炭とか……

そうそう。

–穴あき炭みたいな……

あれはなかったですね。あれは別のとこでやってました。工場がちょっと離れたところにありまして，それは手作業みたいな感じだったです。

–そっちの工場はいくつぐらい建物が……

それはひとつ……

–そっちもちゃんと動いていたんですか，工場は？

と，思います。そっちは入ったことないもんですから。

–その造ったものはどこに運んでいたかとか……

それは分りません。どこに運んでいたか……　貨車にどんどん，どんどん，積むのは間違いない，3 交替でやってますから。

–そうすると，ポンプ係としては，じっさい……

え，それはね，そのあとなんですけれども，1 月末だったですか，変電所の電気係の人とたまたま一緒で仕事してたんですよ。ところが，途中で動かなくなったんですよ，トロッコが。それで，たまたま，見に行ってみようかって，見に行って，そしたらモーターの結線が悪いっていうことと，横にあったポンプが，カップリングがはずれかかっているんですね。そんなことやったら危ないぞっていうんで，1 回，直したんです，2 人で。それを見られてて，技術者がおるということが伝わったようですね。それで，応援に行った帰りに，「ちょっと来い」っちゅうんですよ。

–それは朝鮮人の……

ええ。

–幹部みたいな……

そうそう。「ちょっと来てくれんか」って，言葉がえらい丁寧になったんで，おかしいなと思ったんですけど，そしたら，「こんなきつい仕事はせんでいいから，あしたからこっちに来い」ということで，すぐ，ポッと，次の日から，坑内のほうに回った……炭鉱のほうの保安課のほうに。そこで，電気とポンプを朝鮮の人が 4 人ですか，6 人で一組，チームですね。

–朝鮮の人と組んで，点検，修理，補修を……

そうです。坑内に入って。

–かなり深く……

入ります。200 メーターぐらい。スキップで降りて行くんですけれどね。人車で降りたり，いろいろありましたけど。

–炭坑の中の様子はどうでしたか？

炭坑ね，ずっと採炭はされていたようですね。1 年間のあいだに事故，いっぺんもなかったですから。

–日本人のそういう田口さんみたいな，炭坑の中で作業……

えーとね，保安課にね，3 人おりました。私たちと反対の番に 3 人おりました。

–ほかの課とかについては……

採炭のほうは分りません。

–かなり，炭坑の中は，広いんですか？ 大きいですか？

広いです。大きいです。だから第 1 坑内と第 2 坑道ですか，1 キロ以上離れていたんじゃないですか？ こっちに穴があったり，あっちに穴があったりですから。

–作業員の人はかなりたくさん入って……

そうですね。もう，坑道の近くに社宅みたいなのがあって，そこから通ってるっていうやり方……

–それは朝鮮人ですか？

は，朝鮮の方が多い，全部，朝鮮。

–じゃ，日本人は採炭の作業をやる人は……

いなかったと思いますけどね，お風呂でよく一緒になるんですけれど，ほとんど見なかったですね。結構，親切だったですよ，全部。

–そうですか，待遇はまあまあ，給料もらって……

給料は 1 円 50 銭で，まあまあだったですけれども，なんかかんかあると，皆がかばってくれるし，それから，きつい仕事のときは，「おまえがやれ」って言うんじゃなくて，全部でやってくれる……

–生活は，ご家族は，そのときは……

だから，私が坑内に入るまえ，炭鉱に出始めましたね，そのときは，家族全部がひとつの部屋に，長屋の中で生活してもオーケーってことで……

–じゃ，給料もらって，それで何か買い物して，生活してた？

そうですね。ほとんど生活できるほどの金額じゃないんですけどね。

–そのときは，ご家族何人？

えーとね，両親とお祖母さんがいて，それから，兄弟が 6 人おりましたから。

–まだご結婚は……

いえ，まだ 18 でしたから。

–じゃ皆さん，なんかかんか働いて……

え，働くっていうのは，あの，弟はね，ロシアのところで薪を割ったり，親父はやっぱり，そういうことで，掃除したり，犬の散歩に連れて行ったり，ロシアの将校の家ですね。そういうことやってました。

–日銭稼いで何とか……

そればっかりじゃないから，やっぱり，売り食い……

–市場で，野菜買ったりとかして……

そうです。

–配給なんかはどうでした？

ありました。一応，日本人にも炭鉱で働く以上はあったんです。けれども雑穀が多かったですね。

–1 日，どのくらいですか？

どのくらいですかね，ちょっと量は分りません。それとね，終戦になってからすぐに，うちの近くのお百姓さん，朝鮮のお百姓さんがいたんですがね，いろいろ付き合いもあったもんですから，終戦当時，うち，僕たちが持っていた土地をお使いなさいと，全部あげちゃって，その方からときどき，裏からね，暗くなってから……

–何か野菜とか……

そーっと持って来てくれるんです，見つかると大変だったらしいですから。

–また炭鉱の話ですが，全部で何人働いていたとか……朝鮮人，何百人とかそう

いう単位ですか？

　そうだと思いますけどね。

−相当多いと。

　多いと思います。

−炭坑も 3 交替？

　3 交替。保安課は昼だけなんです。

−じゃ，夜中も採掘してたと……

　そうそう。3 交替で。あのころは 8 時間労働じゃなかったんじゃないかな。ひょっとしたら 2 交替だったかもわかりません。でも 24 時間，動いてました。

−24 時間……　そうすると，一生懸命作業して石炭を掘るということをやってたと……

　間違いないです，それは。

−事故がほとんどなくて……

　事故はいっぺんも聞きませんでしたね。

−排水とかはどうでしたかね？

　だから，排水はポンプでしょっちゅう，バーッと汲んでるわけですね。そのポンプが調子悪いと新しいのと換えるか，修理して換えるかということ，それを……

−うまくできてたわけ……

　できてましたね。まだ，あの当時，1 年ぐらいですから，部品じゃなくて材料としては，いいものが残ってました。

−それはどんなところにあったんですか？ 炭鉱の……

　要するに海軍工廠の時代のやつがそのまま残ってますから。

−在庫があったんですね？

　在庫はたくさん持ってましたね。

−それを使って修理するとかなんとか……

　ただね，あとで聞いた話ですけど，いいものはロシアが持って行ったという話をしてました。だから，本当かどうか知りませんけど，よく言ってましたね。

–それ，ロシアの兵隊なんかは炭鉱周辺にはいなかったんですか？

おりませんでした。赤衛隊っていうのがおりました，朝鮮の軍隊が。はい。

–朝鮮人の赤衛隊が警察，保安係として……

そうそう，おりましたね。

–でも，ソ連兵はほとんどいない……

ソ連兵は炭鉱の中では見ませんでした。だけど最初に収容された収容所の近く，それから収容される前には，もう，うろうろしてました。

–煉炭工場にもいなかったんですか？

おりませんでした。

–そうですか。意外と平穏ですね。

思ったよりか，炭鉱の，あそこはよかったですね。ただ赤衛隊が非常にうるさかったです。

–うるさいっていうと……

何かあるとすぐ駐屯所ですか，そこに引っ張りこんで，拷問みたいに座らしていろいろ尋問したりなんだりして，いやがらせをやってたようですね。働いている者にはそんなことなかったですね。やられたって話はときどき聞きましたけどね。

–それが 46 年の 1 月からいつまでそういう生活……10 月までずっとですか？

えー，そうですね。引揚げて来たのが次の年の 8 月のね，10 日だったですかね。それも 2 日か 3 日前に急に言ってきたんです。

–誰がですか？

日本に帰してやるから準備しろと。赤衛隊から。いつとは言わないんです。そして，出発の前の日に，明日の朝 5 時にどこどこに集合，ちょうど社宅みたいなところのちょっと先に駐屯所みたいなのがあるんです。その前に集合をさせて人員全部チェックして，そして，ガイドつけて，「行け」と。それで終わりです。

–何人ぐらいですか？

えーとね，62，3 人いたと思います。

–それでどういうルートを……

遂安というところから鉄原に抜けて……

–鉄道？

いえいえ。

–歩き？

はい。じっさいはね，遂安でトラックが待ってるんです。ていうのは，お金をなんぼ出しなさいと，そしたら乗せて行ってあげますよと。お金のない人は歩いて行きなさいと。欲ですね（？）。それで，鉄原の手前まではトラックで連れて行ってくれます。

–それはちゃんと手配があって，赤衛隊から連絡があって，トラックが……

待ってる。それで日本人の金を全部集めようっていうことですね。

–それで遂安までは……

歩きました。2 日かかりました。ていうのは，女，子ども連れですからね。

–62，3 人というのは女，子ども全部含めて……

全部含めて。途中からね，えー，捕虜収容所から抜け出した若い人が加わりました。いつのまにか。どこからどう入って来たか知らない，あっという間に。遂安の手前ぐらいですかね。5，6 人のひとが。もう普通の洋服着てるから分かりませんけど，動作も軍人であるということは間違いなかったですね。日本人の兵隊が収容所を脱走して，それで，家族の中に紛れ込んで，そして，引き揚げて来たんですけどね。

–遂安でトラックに乗って，鉄原まで……

鉄原の手前まで。手前です。それから，38 度線を越えたんです。その越えたのが 8 月 15 日です。

–ちょうど 1 年……

ていうのは，案内してくれた人が，15 日だったら，要するに，終戦で我々は勝利をした日だていうことで，どんちゃん騒ぎをやってるはずだから，夜の間に脱け出せと……

–それは朝鮮人の……

これを商売にしている人がいるんですよ。

–そこでもお金払って……

そうですね。義州だったか，議政府か，京城の手前にありますね，議政府っていう，あそこに入ったんです，川を渡って。そしたらもう，米軍のトラックが待ってました。

–それも手配の……

何か，できてたようですね。何か，しょっちゅう，そこから，議政府に運んだようです。

–米軍はタダで乗せてくれたんですか？

米軍の議政府の収容所がありますね。そこに引揚者が入れられて……1 週間おりましたかね。それから貨車に乗せられて釜山まで行って，それで博多に上陸したんです。

–非常に運が……

運がよかった，はい。

–運がいいですね，ほかの苦労話はずいぶん伺って，大変だったと……非常に平穏で，すべて……

平穏なようですけど，実際にはだいぶ苦しかったですね。その前に 2 遍ほど，ブタ箱に放り込まれましたからね。

–あー，ブタ箱はいつですか？

えーとね，炭鉱に行っているときに，脱走，調べに行ったんですよ，若い連中と。私，もともと学生時代，山岳部におりましたもんですから，山歩きは慣れてるし，じゃ夜，コース探って来るって，遂安の手前でね，見つかったんです。それで連れて行かれて，それで連れ戻されたんです。

–それでブタ箱に何日間か……

えーと，2 日泊りました。そしたら出してくれた。というのは寺洞炭鉱で働いておると言ったもんですから，遊びに行って道に迷ったって言ったら，しようがない奴らだな，いうんで帰してくれたんです。

–引揚げのときはご家族一緒に，トラックで，お祖母さんも乗せて……

はい。

–でも赤衛隊がずいぶん，引揚げのときにちゃんとやってくれたというのが……

ていうのは結局，何ていうんですか，協力したということがあったんじゃないでしょうかね……日本の，あの，病院におった看護婦さんたち，半年で帰ったという話，聞きましたけどね，半分ぐらい。実際にはどうだったかは分かりません。

–あれですかね，日本人いなくてももう大丈夫だと，ポンプとか何とか，そういう見通しで，もう，帰そうという……

そうだったのかもわかりませんけど，かなりね，技術者おりましたよ，朝鮮でも。ずっと海軍工廠に勤めてた朝鮮人もおりますからね。そういう人たちが全部，トップクラスのほうになってますし。

–その一緒にですね，8 月 10 日ごろに引揚げたときに，寺洞炭鉱の日本人はすべて……

いや，すべてじゃない。私たちがね，2 回目か 3 回目です。分けて，少しづつ帰していくというやり方ですね。

–第 2 陣ぐらいということですね。その後に帰られた方についてのお話は……

全然，ありません。聞いてないです。私が帰って来たのはね，鐘紡で一番早かったような話だったです。

–その後も鐘紡にお勤めに？

えぇ，そのまま復職しましたから。

–じゃ，いろいろ，引揚げてきた他の方のお話は聞きましたか？

えーとね，私の上司だった方が高砂工場におられるというので，行ったんですよ。で，その人に会ったときに，やっぱり炉前におったちぶさんとかいう方もおられましたけど，もう亡くなられたと思いますが，それから藤原さんにも，私，九州の中津という工場におりましてね，そのときに藤原さんには会いましたですね。

–どんなお話，えーと，藤原さん……

えーと，藤原じゅうぞうさんという方は工場長をやっておられたんですけど，

後にね，重役になられたんじゃなかったですかね，鐘紡の。

–藤原さんがどういうふうな形で引揚げられたかというのは……

　あ，ちょっと分かりません，だいぶ遅れて帰って来られました。

–どこで働いていたかということは……

　それは聞いてません。あの，製鉄所の社宅におられた方は，接収されてから，やっぱり，1 か所の社宅の一部に全部集められたらしいです。そこから引揚げたようですよ。ていうのは，寺洞炭鉱 [ に ] 出始めてから訪ねて行こうと思って，区域を別にして出て行くと，ちょっとうるさかったんです。何しに行くのかとか，とくに私のところは，紋繍町というところだったんですけどね，師範学校のすぐ近くで，製鉄所があったのは船橋里という，で，区域が違うんですよ。そのために，見慣れん日本人がうろうろすると，ということで，ちょっと寄りつけなかったですね。だから，日本人同士の交流は非常に警戒したようです。炭鉱の中におってもですね，我々がおったバラックの長屋とですね，それから 300 メーターぐらい先にあるんですよ，その長屋と接触することを避けてましたね。

–そうですか，あのー，こういう記録なんかもあるんですけどね，朝鮮終戦の記録という，ここで北朝鮮に残留した技術者の話なんかも出てくるんですが，技術者たちがですね，北朝鮮工業技術者総連盟日本人部というのを作っていたんですけど，こういうようなことは全然……

　知りません。

–そうですか，これは 46 年の 11 月なんですが，これで，この連盟日本人部に，ずいぶん，2，300 人，加入していて，いろいろお互いに連絡とって行動を共にしていたということなんですけど，そういうとこには全然……

　それは平壌市内の方でしょう。

–えー，これは北朝鮮全体……

　全体ですか……知りません。

–これはごく一部の方なんだなぁ……

　だから工業学校出だけで技術者とみるわけですね。

–基本的には大事に，ある程度，された……

　されたということですね。

–じゃ，煉炭工場に残った人たちのその後については……

　全然分かりません。というのは，我々みたいに接収されて別のとこからひょこっと来て，そして，煉炭工場で働けと，で，下働きみたいなのをさせられたグループと，それから，こっちの別の寺洞の町の中から接収されて，要するに，海軍工廠関係の方じゃないかと思うんですけどね，その人たちが連れて来られたグループとか，いろいろあるわけなんですよ。その接触は，番が違うから，会わないと。

–いろいろなんですよね，例えば商売やってた人とか，平壌の市内でですね，そういうような人たちが押し込められて，収容所とか苦労して，日本人会みたいな世話会みたいなものできて……

　あ，それは聞いたことありますよ，日本人会っていうのは。

–そういうのとの接触はなしですか？

　何かね，それはね，あったようです。あったようですけど，夜，出られないもんですから，夜間外出禁止ですね。だから昼間だけとなると，日曜日だけ休みなんですよね。で，それに，長屋の長みたいな人がいて，世話役みたいな人が，その方が話を聞いて帰って来るっていうぐらいのことで，市内におられる方のように綿密なあれがなかったですね。

–寺洞炭鉱から平壌の中心までは結構あるんですか？

　電車でね，1 時間かかります。

–じやあ，滅多に平壌の街には……

　行くということはなかったです。

–日曜日は休みだったんですね。日曜日は……

　家におるか，寺洞の街に買物に行くか……　それか，購買部がありますからね，炭鉱の中に。ていうのは海軍工廠の購買がそのまま残ってますから，そこに買物に行くぐらい。

–購買部はどんな感じですか？ そんな沢山，なかったと思うんですけど，物が。

そうですね，割に大らかだったように思いますよ。日本人も朝鮮人も一緒になって，で，購買部で買えるっていうのは，炭鉱で働いているか，煉炭工場で働いている人だけですから。街の人は入って来れないっていうことで。だから，同僚だっていう感覚じゃないんですかね。

–どのくらいの広さですか？

広さはね，そんなに大きくはなかったですね。スーパーマーケット……

–小さなスーパーマーケット……

そうですね，その程度。

–そこにお米とかいろいろな物があった……

ありましたね。お米はまた別です。

–お米以外の野菜とか，罐詰とか卵とか……

ま，そんなもんでしょうね。肉類，魚類はありましたね。お酒は全然おいてなかったです。

–結構，高かった？ 物価が上がったんですね。

高かったですね。

–どんどん上がって……

上がっていきました。

–大変だったですね。

大変だったです。一番，最初のときはね，お米 1 升が朝鮮紙幣で 10 円ぐらいですか，7 円とか 6 円というときもありましたけど，10 円ぐらいでした。それが軍票が出始めてから，あっという間に 20 円，50 円，100 円というような……

–帰るときはいくらぐらい？

帰るときは……そんなもんかな，もっと，百二，三十円したのかもわかりません。

–賃金のほうは？

1 日 1 円 50 銭で，そのままで。

–じゃ，全然，足らないですね……

足りません。だから売りつなぐか，弟や親父たちがロシアのあそこに仕事に出て行って貰って来るか……

–そっちのほうがもう少し貰えたんですか？

えーとね，仕事の量によって違うんですよね。その日によって。だから 1 円 50 銭よりはよかったようです。ロシアのほうは。その代わり，軍票なもんですから。

–軍票も同じように使えるわけですね？

使える，使えるんです。で，購買部では軍票も使えるし，伝票も使えるわけですよ，1 円 50 銭の伝票がね。現金も使えますし。

–街の寺洞の店やでも大丈夫だったんですか？

大丈夫，軍票は大丈夫です。それから売り食い，それから，終戦と同時に貯金を全部下ろしてますから。日本円に換えたり，すぐ引揚げるというあれがあったもんですから，貯金としては残してなかったはずです。

–じゃ，その現金を使って何とか……

そうですね。だから悲惨な人もあったようですよ。

–お金がなくなってどうなるか，というその辺のときに引揚げになった……

え，そうです。もうギリギリで。だから日本円にしてもそう大して持って帰ってないですよね。

–でも多少は持って帰った……

えーと，少しは持ってました。それでも日本に帰ったら，200 円だったですか，現金に換えられたのは，あとは換えられませんからね。

–平壌の様子はほとんど……

そうですね，とくに，電車で終点まで乗って，あれは何通りっていうのかな，メインストリートがあるんですね，大同江，発ってすぐに，ミカドって言ってたようですけど，そこら辺までは行ってもいいんですよ，ぐるぐるできるんですよ，要するにメインストリートですね。ところがそれから先の平壌にあった平壌神宮，牡丹台の近辺は立入り禁止だったです，日本人は。

–立入りできるほうが少なかったんですか？

少なかったですね。それと危ないという説もあったもんだから寄りつかなかったっていうのが本当じゃないですか。

–電車はちゃんと動いていたんですか？

動いてました。本数は少なかったですけどね。

–それは朝鮮人が運転して……

昔から日本人の運転手はいなかったですから。

–ほかの工場について，朝鮮製鉄とか，大安に朝鮮製鉄があったとか，三菱製鋼の製鉄所が……

えーと，兼二浦にありましたよね。

–平壌に兵器の製造所があったんですが。

ありました，兵器廠がありましたから。学生時代に勤労奉仕で行きました。2年生のときですから，昭和 17 年。

–戦争が始まってちょっとしてから。

そうですね，17 年。

–勤労動員で。

勤労動員というより，機械科だったもんですから，旋盤を貰いに行ったことがあります。そのときに勤労奉仕みたいにして，3 日か 4 日で持って帰りました。……20 台ぐらい並んでいる部屋だったですね。型も古いやつで，新しいのと入れ替えるときだと思うんですけど，よく分りません。4 台ぐらい実習工場に持って帰りました。

–そこで何を造っていたとか，そんなのは……

全然分かりません。製品なんて全然置いてなかったですから。空っぽになってました。旋盤だけは置いてありました。で，話聞いたところでは，擲弾筒の弾がころがってたという話もあったし，よく分らないんですよ。弾筒こしらえていたという説もあるし。平壌には兵器廠とそれから，航空廠もありましたよ。航空廠は飛行機の整備だけですか……何かやってて。叔父が行ってましたからね。勤めてました，事務屋さんですけど。先輩もだいぶ行ってましたよ。同期のやつも行きましたからね。全部，ロシア，シベリアに送られました。だから

生きて帰ったかどうか，分りません。同期で 4 人行きましたか……

–兵器製造所に関心があって調べていまして，これによると 45 年，終戦後にですね，大爆発を起したっていう話があるんですよ。そんな話は聞いたことありますか？

聞いたことないです。

–ほかに何か，とくに印象に残ってるようなご記憶の話はありますか？

そうですね，何か，全部解体されて，機械類を全部ソビエトに運んだという話は聞きましたね。

–それは寺洞炭鉱にいた当時……

はい。

–それは確認したいんですけど，なかなか難しいんですね。

ちょっと分りませんね。噂ですから。

–鐘紡の製鉄所はその後，北朝鮮が独立して，どうなったかというのは，ほとんど，結論的に言うと，無いんですよ。それが例えば兼二浦とか，あるいは清津の製鉄所とか，ああいうのはずーっと残っているんですよ。鐘紡の製鉄所については全然記録がなくて，そのまま朽ち果てたというか……ソ連軍がある程度持って行ったという可能性はあるでしょうね。

–戦前の鎮南浦の話をお伺いしたいんですが，かなり街の様子はご存じだと思いますが，製錬所とか，いろいろな工場があったんですが，それはどうですか？

えーと，製錬所はちょっと離れたところにありますね，街から。製粉工場もありましたし，それから，理化学研究所，理研というアルミニウムとマグネシウムの工場がありました。そこは実習で行ったことがあります。あとはね，塩田があったな，近くに。

–とくに見学されたのは理研のところぐらいですか？

いや，製錬所も見学しました。何か，東洋一の煙突とかいわれた……製粉工場にも見学に行ったり，実習に行ったりしました。

–造船所は？

造船所は見せてもらえなかった。私たちが見学に行こうというときには海軍

の指定工場な何かで，ドックのところは塞いでいましたからね。昔は漁船しかなかったっていう話が，何か，黒い船があったとかいう話がありますから……

–それは鉄鋼船ですか？

鉄鋼船です。

–造っていた？

何かやってました。修理してたか，そこらへんは分りません。

–精米所なんかもたくさんありましたね。

ありましたね。ま，街自体はそんなに大きくないんですよね。丘陵地帯はりんご園が多かったし，それから，河の辺は漁港ですね。漁船が多かったですよね。海からちょっと入り込んで，鎮南浦という街があるんですね。

（帰国後の話―略）

–お話し聞いていると平壌は比較的……

北のほうに比べるとよかったのかもわかりません。

–みんな決死の 38 度線越えという……

それは確かにありましたよ。機銃掃射，何べんもやってましたね。夜，探照灯，照らしてバリバリバリってやるときがあるんですよ。一番怖かったのは，子どもが泣くことですね。途中で子どもさんだいぶ亡くなりましたよ。赤ちゃんが二人，3 歳ぐらいの子が一人……病気，それから，声を立てないんで，お母さんが口塞いで窒息したり……気の毒だったです，見ておれんかったです。

–お母さんは殺すつもりではなくて……

抱きしめて。その場で埋めようっていうんだけども，お母さん，放さなかったですからね。それがいっぺん，ありましたね。昼間歩かずに，夜歩くことをやりましたからね。昼間歩くと襲撃される恐れがあるんですよ。遂安に行くまで。それからトラックも 2 回乗り換えますからね。ここからここまで歩けとかね。山越えしろとかもありましたけど。

–最後に越えるときにガイドはちゃんとやってくれたわけですか？

本人は行かないんです。ここからここに向ってまっすぐ歩け，と。それで探

照灯が来るから，そのときは伏せとけとか，動くなっていうことを教えるだけで，本人は行きません。

–田口さんご自身はソ連兵に何かされたとかそういうことはなかったんですか？

いっぺんもありません。ただ，うちの親父がソ連の官舎みたいなところで仕事をしていたということと，弟もそれで行ってたっていうんで，認可証っていうんか，腕章を貰ってました。ソ連兵が入って来ると，それを見せるんですよ。こうやってお前のところで仕事しているよっていうんで，そうすると入って来てもそのまま帰ってしまったですね。家にいたとき，最初，自宅にいたころですね。

（地図を見ながら燃料廠の位置関係の話―略）

–炭鉱で何か気がついて印象に残っておられることがありますか？

どうなんですか，やっぱり働いている人たちは大変だったんじゃないですかね。石炭下ろしが大変だったですから。

–働いている朝鮮人と話をする機会はあまりなかったですか？

いや，ありましたよ。食事のときなんかは，同じところで食べてますし，休憩所みたいなところで一緒に，弁当持って行ってますから。

–朝鮮の人とはどんな話をしてましたか？

世間話が多かったですね。今，お前のところどうしているかとか，困ることないかとかね。こういうもの持ってないかとか。

–遠くから働きに来ていた朝鮮人の人はいましたか？

おりましたよ。

–元から燃料廠で働いて人以外に……

以外に。どこらへんから来ていたかは分かりませんけど，男子寮みたいなのがありましたから。

–独身寮で。

そうですね。

–独身寮は昔からあったんですか？

あったと思います。

–新入りとして来てた人もいたと。

そうですね。だから日本語も全然できない人もおりましたよ。若い人で。37，8 でいなかから出て来て……日本語はとにかく，あいさつとちょこっとしかできない……日本語が分からないというのを口実にしたのかもわかりませんけど，日本語は絶対しゃべらない人おりましたね。

–全体で何人いたかということは分りませんね？

それは分らないです。煉炭工場で 4，50 人，入る休憩所がひとつと，それから，坑内では小さな部屋が 2 つ 3 つあるぐらいですか……

–千人か二千人，働いていたんですね，終戦前に。

でしょうね。

–いろいろな貴重なお話をお伺いすることができてありがとうございました。燃料廠にかんしては戦後どうなったか，全然分らなかったんですね。大体，幹部はソ連に抑留されましたので……

抑留されてしまってますね。なかでもね，技術屋さんでも残った人はいるんですよ。そんなこと聞いたことありますよ。あの人はどうしても残さないここが動かないと……

–それは田口さんが帰られたあとも残った……

じゃないですかね，会ったことないですけど。偉い人のようだったですから。

以上